

目指す学校像	「未来へよりよく生きる」生徒を育む教育活動を展開する学校
--------	------------------------------

重点目標	1 学びの自律化に向けたアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善 2 自ら心身を鍛え、安全で健康的な生活ができる生徒の育成 3 地域、保護者の信頼に応える学校づくり 4 研究課題「教科横断的な視点に立った資質・能力の育成」達成のための校内研修体制の充実
------	--

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価		年 度 評 価		学校運営協議会による評価				
年 度 目 標		年 度 評 価		実施日令和 年 月 日				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	学力向上について(現状) ○さいたま市学習状況調査において、各学年、各教科(国語、数学、社会、理科)の平均点は、市の平均点を大きく上回っている。 ○ホワイトボードシート、タブレット、デジタル教科書(今年度は数学とG・S)等、ICTを活かした学びのハードが年々充実してきている。 (課題) ○全国学力・学習状況調査において、「自分で課題を立てて情報を集め整理し、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいるか」の問いで、肯定的評価は県平均を上回っているが、これからの生徒に必要な力なので、さらに高めたい。 ○ICT機器が故障すると、修繕に時間がかかり、学習に影響を及ぼすことがある。	・学びの自律化に向けたアクティブ・ラーニングの視点から授業改善を図れている。 ・すべての生徒が、いつでも授業に集中できる、ユニバーサルデザイン(UD)の視点で教室環境を整えている。	①ICTを活用した授業改善を図るため、全教員の授業参観とフィードバック及び校内研修を行う。②全国や市の学習状況調査結果を分析し、指導改善研修を実施する。③長期休業中の課題に、端末による振り返り学習を位置付ける。④2学期に「本太中 STEAMS タイム」を位置付け、問題発見・課題解決学習を実施する。 ①年度当初の教室経営計画立案時、UDに基づく教室経営を各担任が立案、実行する。②各授業において、担任、教科担当が、UDを意識した板書計画を立案、実行する。③ICTの安全な使い方を確認する全校集会や安全教室を年度当初の早い時期に実施する。	①意図的・計画的な授業参観の実施と年間指導計画の見直し、教育委員会との連絡・調整によって、具体的方策が4つとも実行できている。 ②指導計画の点検や授業参観の実施で、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が行われていることが確認できる。 ①UDに基づいた教室環境の整備により、教室前面の刺激量が調整されている。また、授業時に、板書の構造化が確認できる。②ICT機器の故障を昨年度より減らせるようにする。また、ICT機器の誤った使い方をしていない。				
2	安心・安全に関する取組(現状) ○全国学力・学習状況調査において「学校に行くのは楽しいと思いますか」という問いや「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」等の問いに対する肯定的評価が、県の平均を大きく上回っている。 (課題) ○1年生は、新しく始まった中学校生活に対する不安感があり、生活の変化が心身に与える影響も大きい。一人ひとりの状況を丁寧に把握し、組織的に対応する必要がある。 ○今年度から令和7年度にかけて行われる、学校施設関連のリフレッシュ工事への対応が必要である。	・生徒一人ひとりの自己肯定感を高める指導を組織的にやっている。 ・リフレッシュ工事中、生徒が安心、安全に取り組める学習環境を整えている。	①各学期の初めに全校生徒対象の「心と生活のアンケート」と担任による二者面談を実施し、生徒の悩みや不安に対するアンテナを高くすると共に、生徒が自己肯定感を高められるような声かけを積極的に行う。②校内委員会を中心に「報告・連絡・相談・見届け」を徹底し、学校として生徒が抱える課題に組織的に対応する。 ①保健体育科はリフレッシュ工事を考慮して、年間指導計画を作成する。また、活動の一助として、近隣の公共施設と連携を図る。②安全確保のため、担当者や生徒の登下校や活動に関わる導線を確認し、安全指導の徹底を図る。	○様々な生徒の課題に、校内委員会を中心に、迅速かつ的確に対応し、その取組を保護者や関係機関と適切に連携することができている。 ①リフレッシュ工事が保健体育の授業に与える影響を、最小限にできている。 ②リフレッシュ工事による、生徒の怪我等の事故がゼロである。				
3	開かれた学校づくりに関する取組(現状) ○昨年度、学校運営協議会の方々に対し、適切な感染症対策を行いながら、学校行事や式典へご参加をいただき、協議会では生徒と直接意見交換する等、本校を理解していただくための努力を重ねてきた。 (課題) ○令和4年度の全国学力・学習状況調査において「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という問いに対する生徒の肯定的評価の割合が、県平均と比較して若干低い。生徒の地域に対する関心を高める工夫が必要である。	・地域に、より学校を開くための工夫を重ねている。 ・生徒が、地域に対し関心を高めるための取組を重ねている。	①学校運営協議会の熟議に生徒を参加させる等、本校を理解していただく取組を重ね、いただいた様々なご意見を、今後の教育活動に活かす。②学校HPや学校だより、学校公開等で、本校の教育活動や生徒の様子を積極的に伝えていく。 ①4月の集団下校訓練において、各自治会の担当者から、自治会の活動と地域活動への中学生の参加について、お話をいただく。②学校地域連携コーディネーターを窓口として、生徒へ地域ボランティア活動を紹介し、積極的に参加を呼びかける。	①学校自己評価に係る保護者アンケートで「学校の情報発信が積極的である」「学校が保護者や地域と協力し合って教育活動を進めている」等の問いに対する肯定的評価の割合が80%以上になる。②学校運営協議会において、年度評価で「ほぼ達成」の評価をいただける。 ○今年度地域から募集を求められたボランティア活動において、生徒が積極的に参加している。				
4	教職員の資質向上に関する取組(現状) ○今年度、さいたま市教育委員会より「教科横断的な視点に立った資質・能力の育成についての研究」の指定を受け、特に生徒の言語能力を高めるために、校内研究推進委員会が中心となって、研究推進体制を整え、組織的に研鑽を重ねている。 (課題) ○これまでの調査により、本校の生徒は調べたり、それを基に考えたりすることは好きだが、そうした結果を発表することを苦手と感じている生徒が一定数いる。今年度の1月に予定している本校の研究発表会で研究成果を公開し、市教育委員会から指導を受けたり、他校の教員から意見をいただく等して、生徒の言語能力を高め、自分の考えをきちんと他者に伝えることができる力を身に付けさせたい。	・「教科横断的な視点に立った資質・能力の育成についての研究」の指定を受け、特に生徒の言語能力を高めるために、校内研究推進委員会が中心となって、研究推進体制を整え、組織的に研鑽を重ねている。	①「教科横断的な視点に立った資質・能力の育成についての研究」の研究推進及び効果的な研究発表の方法について、研究推進委員会を時間割に位置付け、計画的に実行する。②「本太中学校・自己表現マニュアル」を活用し、生徒の言語能力を高める授業を全教科で実施し、生徒の言語能力を高める。③各教科で、授業の相互訪問週を数回程度設け、教員同士がお互いに授業を参観し、それぞれの気付きを交換し、研修しあえる機会をつくる。③教員用の「キャリア振り返りシート」を活用し、各教員のキャリアに応じた資質向上策について、教職員との当初面談の機会等を活用し、対話に基づきながら、各教員の今後の課題を明確にしていく。	①学校自己評価に係る教職員アンケートで、校内研修推進体制の肯定的評価が90%以上になる。②「教科横断的な視点に立った資質・能力の育成についての研究」のなかで、特に言語能力の活用についての生徒の肯定的評価が80%以上になる。③校長との面談において、各教員が現在のキャリアに必要な資質能力を身に付けているか振り返る機会を設け、今後の研修課題を明確にできている。				

学校運営協議会からの意見・要望・評価等